

ねらいであるのに対して、「低开」は主として税制上の特別措置による企業の誘導がねらいである。このように本地区は、国の地域指定を受けて工業開発の促進をはかるべき地区であるが、産業基盤施設、都市施設などの整備を行なうとともに、農林漁業の近代化をはかり、また商業、サービス業など関連産業を育成して、地区の総合的發展をはかる必要がある。

なお、阿蘇高原、菊池溪谷、菊池・山鹿・玉名などの温泉に恵まれた本地区の特性にかんがみ、新しい観光ルートの形成、新しい観光資源の開発など観光開発の重要性を特記したい。

描かれゆく 城北開発図

まず、手元にある地図をひろげてみよう。熊本市を中心に放射状に伸びている国道三号線、五七号線、二〇八号線等の幹線道路およびこれらをつなぐ城内地内連絡道路網が発達し、陸上交通の要衝となっているが、これに、南北を縦断する九州縦貫高速自動車道、東西を横断する阿蘇スカイライン、城北開発横断道路が登場することになる。いずれも本地区の

飛躍的な開発発展を約束する画期的事業である。

鉄道は、九州を縦、横断する鹿児島本線、豊肥本線、港湾は、地方港湾荒尾港、長洲港がある。

このように本地区は、従来から交通の要衝であったが、現在、スケールの大きい交通体系の整備が着々と進められており、本地区開発の重要性はますます増大している。

工業開発

産炭地振興計画とも関連して、荒尾市、長洲町を中心とする有明臨海工業地帯について、企業の進出テンポに応じて、その整備をはかることにする。荒尾地区については、現在三井が造成中の荒尾臨海一号地の整備、三井系企業の南下等を促進することとする。長洲地区については有明製鉄に譲渡した用地の活用を十分検討するとともに、食料品、工業用プラスチックなど、最近立地をみている企業とも関連して、新しい企業の立地を促進する。

農業

玉名平野、菊池盆地が穀倉地帯をなしており、特に良質米として知られる菊池米の主産地を含み、単位面積当り収量も高い。栗樹は、みかんが金峯山西麓から小岱山南麓にか

けて集団産地を形成しているが、筑肥山地、菊池盆地周辺台地は新興果樹地帯として伸びており、荒尾のナン、菊池川流域のブドウも今後期待される。

このほか菊池盆地、台地部はダイズ、アズキ、アワなどの主産地であり、畜産では、乳牛、養豚が伸びており、菊池川中、下流域は、緑川中流域とともに、本県養蚕の中心地である。

このように特色ある本地区の農業振興のため、農業構造改善事業を進めるとともに、玉名平野土地改良事業、菊池台地農業開発など抜本的な基盤整備を推進することとしている。

水産業

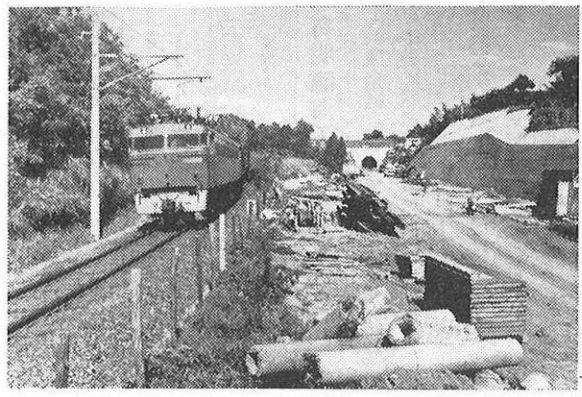
有明海に面するのり養殖業を主業とする漁家地帯の形成を促進する。

本地区開発のあり方について眺めてみたのであるが、新産業都市北部の工業開発拠点として、また九州の中枢都市として、その機能の充実をはかっている熊本市域の都市圏の一環として、同市域と北九州とを結ぶ本地区におかれた位置、役割は重要で、熊本市域および北九州からの波及効果を受けとめながら、本地区の特性に基づいて、意欲的な開発がなされなければならない。

また、東部の阿蘇地区は、現段階では未開発地域とみられているが、無限の開発エネルギーを秘めている。この阿蘇地区と玉名、山鹿、菊池などの観光温泉都

市群を結ぶことによって、スケールの大きい新しい魅力を持った観光ルートが形成されることになり、また、産業的にも非常に大きい開発効果をもたらすものと考えられる。このルート形成を果すものが、本地区開発上の最重要事業の一つと考えられる城北開発横断道路、阿蘇スカイラインである。

西部は、有明海を隔てて長崎県と対するが、長洲—多比良間の有明海自動車航送船の重要性が増大するものと考えられる。この地区は平地部、なだらかな丘陵部が比較的多く、輸送施設の整備にしても工場用地、住宅用地の開発その他の



複線化・電化工事も着々と...

施設の整備にしても、好適な地理的条件を有している。

いふならば、城北地区は、すぐれた素地のキャンパスであり、これに伸び伸びとした開発の構図が今や描かれつつあるといえよう。

地区開発のハイライト

阿蘇スカイライン

九州横断道路の阿蘇第一の宮町手野地点を起点として、大観峯一かぶと岩—菊池溪谷を経て念仏橋に至る二八詰の産業観光路線であり、昭和四十一年度新規調査路線である。

・全体計画二五億円

城北開発横断道路

阿蘇スカイラインと連絡して、東の大分地区、西の不知火有明大牟田地区の両新産都市を直結し、さらに長崎とも結ぶ九州横断の最短ルートである。九州地方産業観光道路として最も重要な新規格線となるのみならず、国道五七号線のバイパスとしての意義も大きく、九州内陸部産業を新たに開発する大動脈となることは明らかである。

一方、観光的には、九州における「国際観光S字ルート」の一環として、その中央部にあたり「やまなみハイウェイ」から標高八〇〇呎のカルデラの大景観と

よこがわ

“米どころ”で拡がる食生活改善

米どころ菊池平野。そのなかでも、特に、「砂田米」と呼ばれ、味の良さを全国に知られる、すし米の産地七城村。

その七城村に、婦人会による食生活改善グループが誕生し、栄養教室を中心とするさまざまな実践活動が続けられているが、実は、このうまいまい「米」に端を発しているのである。

米どころだけに、当然、農業構造改善事業も、県下に先駆けて実施され、また、換地によるは場整備も大きな規模で完了している。そして、これは至極当たり前のことだが、住民の食生活は、米食偏重のしかもたっぶり食べる習慣が根深い。

食生活改善グループが、まず注目したのは、国民健康保険受診件数のうち、消化器系疾患の比率の高さであった。昭和三十五年、三二、二六件と断然トップを占めていた。栄養教室では、直ちに食生活の改善、特に、米食の改善に着手し、また、油摂取をねらった計画栽培グループの野菜生産など、具体的な活動が開始された。村の構造改善事業によるそ

さい、果樹、酪農、食鶏などの振興と並行して、着々と成果をあげていった。

この種の住民運動にとって、最も重要な組織づくりについても、極めて計画的に、確かなやり方で進められている。毎年四〇名づつ村から委嘱された食生活改善推進員が、栄養教室の講師をまわち履修し、末端グループの核となって活動の輪をひろげていくのだが、五年間の積み重ねは、結核検診一〇〇％、成人病検診、乳幼児検診八〇％、三才児検診九〇％と、住民の健康意識は、完全に末端まで浸透していった。

第一の目標として掲げた栄養および食生活改善の成果は、国保における胃腸疾患件数の急激な減少となってあらわれている。

七城村は昭和四十年年度「共同保健計画町村」の指定を受けたが、これは、過去の実績の総まとめ的な保健計画ともいべきもので、七城村の場合、自らの手で自らの健康を守るという公衆衛生の思想は完全に住民のものとなっているのである。

地域格差を是正するためには、地域内部における経済循環の高度化と他地域との広域的な結合を図る必要があるが、この縦貫道の建設はその意味から九州の大動脈として、画期的な経済効果が期待される。

(注・二九頁を参照)

鹿児島本線複線化電化

鹿児島本線は、九州における産業経済の大動脈として、南北九州とを結び、さらに東京、大阪の大都市に通ずる幹線であるが近年、旅客、貨物の輸送量は限界にきているので、新

九州縦貫高速自動車道

九州地方経済が国民経済の伸展と平行して発展し、九州の